

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：35305  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520699  
 研究課題名（和文） 『太政官日誌』を対象にした史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究  
 研究課題名（英文） Interdisciplinary research about the Dajokan Nisshi, the Official Journal of Meiji Government : the construction of its historiographic and the studies on social process and culture in the Boshin War term.  
 研究代表者  
 藤實 久美子 (FUJIZANE KUMIKO)  
 ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授  
 研究者番号：90337907

研究成果の概要（和文）：研究対象は『太政官日誌』（慶応4年2月～明治2年12月・通巻304号）である。(1) 所在調査により日本国内322ヶ所の機関に所蔵されることが確認された。(2) 2種の書誌的な調査カードによって現地調査を実施し、現地調査報告書の作成全70件を行った。(3) クラウドサービスの google Document により10万件以上のデータベースの共同的構築と共有化をはかり、グラフ化し、同版（修あり）・異版の混入状況などを明確にした。(4) 戊辰戦争期の社会文化論の構築に向けて、『太政官日誌』の作成、交付、販売、修正という情報流通、読者・官庁文書のなかでの蓄積という受容の側面が解明された。

研究成果の概要（英文）：This research focused on 304 numbers of Dajokan Nisshi published in 1868-1870:(1) It has revealed that 322 organizations in Japan archive some or all numbers.(2) The original two types cards were made for the bibliographic survey. Totally 70 survey reports were written on their conditions.(3) The databases with more than 100,000 bibliographic data on the Google documents of crowd computing service have been constructed cooperatively and become common. They revealed some editions and the combination of their variations. The original research sheets and graphical documents are located in the web site of this research.(4) Each research member has fulfilled to study about the social process and culture during the Boshin War ; the information flow through the issue and dissemination of the Dajokan Nisshi ; its readers and their activities ; the archived process as the official documents in the Meiji government.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史・史料研究

キーワード：戊辰戦争期社会文化論・木版刊行物・『太政官日誌』・書誌データ・史料学

1. 研究開始当初の背景

(1) 戊辰戦争期（慶応4=明治元〔1868〕年1月～明治2年5月）という、わずか一年有

半においても、その間に刊行された木版刊行物の総量は膨大であるため、その所蔵状況・書誌状況は、概況さえ把握できていない現状

にあり、ために、この種の研究の基礎として必要な書誌的研究は、ごく一部の刊行物に対する個別的研究しか存在せず、さらに書誌的研究を踏まえた上での刊行物の記事内容に対する個別研究も、極めて乏しいのが現状であり、それらのわずかな成果が、ともに本研究に結集した共同研究メンバーによるものである、というのが現状である。

(2) 本研究に先立つ研究として、翻刻本に橋本博編『維新日誌』（静岡郷土研究会 1932年）・『改訂維新日誌』（名著刊行会 1966年）があり、また影印本には石井良助編『太政官日誌』（東京堂出版 1980年）と北根豊編『日本初期新聞全集』（ぺりかん社 1988～1990年）がある。だが、これらの翻刻本・影印本は、幕末から明治 5～6 年、さらには同 9 年までも含む長期間の木版刊行物を対象にしたものであるため、一部の機関に現存するごく一部の木版本を選定し、翻刻もしくは影印したものとならざるを得ず、それに規定され、各氏の解説も総じて大雑把な概説に留まらざるを得ず、機関ごとの所蔵状況や書誌状況、さらには異本状況の調査を踏まえたものとはならなかった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、政治・社会の激動期である戊辰戦争期（慶応 4＝明治元〔1868〕年正月～明治 2 年 5 月）の維新政府系の出版物である『太政官日誌』に関する調査を通じて、当該期に大量に現出した木版刊行物に適合的な史料学を確立し、合わせて、当該期の社会文化の研究をおこなうことを目的とする。

(2) 研究の目的は具体的には、以下の 4 点に定める。

- ① 日本各地に散在する『太政官日誌』の所在状況を確認する。
- ② モデル調査を実施し、同版・異版・異本情報を収集する。
- ③ 史料学的な調査方法論を確立し、提示する。
- ④ 維新政府系の『太政官日誌』を通じて、諸情報が流通していくメカニズム及びその受容と影響に関する問題を解明して、当該期に特有な社会文化の展開とその過程について展望する。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究の調査プログラムは、『太政官日誌』の所在状況の把握、モデル的な実地の現地調査、調査カードの作成、調査報告書の作成、必要な事項についての現地再調査、情報の共有化と分析からなる。段階的に調査内容を精密化していくものである。調査の大きな流れは、以下の①～⑥の通りである。

① 所在情報の収集。

② 所在・閲覧条件などの確認。

③ 現地調査（概要用の調査カード A・細目調査用の調査カード B を使用する）の実施と、現地調査報告書の作成。

④ 調査カード情報のデータ化・集計、グラフ化、共有化。

⑤ 現地再調査の実施。

⑥ データ化した情報の解析。

(2) 研究全般の進め方と研究成果の公開方法は、以下の通りである。

① 定例研究会の実施。通常の情報交換はメーリングリストを活用し、定例研究会は年 2～3 回開催する。

② 公開研究会の開催によって議論の場をもつ。

③ 本研究の成果を WEB 報告書によって公開する。また戊辰戦争期木版刊行物研究会の HP を開設し、研究会の研究結果を公開する。

## 4. 研究成果

(1) 『太政官日誌』は通巻で 1,178 号まで発刊されたが、『太政官日誌』は日本各地の史料収蔵機関に 322 件散在することが明らかになった。調査結果は WEB 報告書の第 1 部「史料学的考察」に石田七奈子『『太政官日誌』所在状況一覧』、同「旧大名家史料群中の『太政官日誌』所在状況一覧表」ほかに示される。

(2) 『太政官日誌』調査カード A (2010-2012 年度版) と『太政官日誌』調査カード B (2010-2012 年度版) およびマニュアル (2010-2012 年度版) を完成させた。なお、調査カード修正の方向性については、WEB 報告書の第 1 部「史料学的考察」に収載した藤實久美子『『太政官日誌』共同調査の方法と成果』に示した。また、調査カードと WEB 報告書では専門的な書誌用語を多用することから、WEB 報告書の第 1 部「史料学的考察」に藤實久美子「本報告書で使用する書誌用語について」を掲載した。

(3) 2 種の書誌的な調査カードによって現地調査を実施した。モデル的な現地調査を行ったのちには、早急に、現地調査報告書を作成した。現地調査報告書は PDF 化して、Google ドキュメントまたはドライブで共有化した。現在、共有化されている現地調査報告書は全 70 件である。件数の年度ごとの小計と件数の内訳、および調査を実施した所蔵機関名等は、以下の通りである。

① 2010 (平成 22) 年度小計 19 件。

愛知県図書館 (2 件)、岡山大学附属図書館池田家文庫 (3 件)、国文学研究資料館山田家文書 (1 件)、中央大学図書館 (1 件)、東京大学経済学部資料室 (1 件)、東京大学史

料編纂所、東京大学総合図書館南葵文庫（1件）、東京大学総合図書館花房太郎旧蔵本（1件）、名古屋市蓬左文庫（4件）、防衛省防衛研究所（1件）、横浜市立中央図書館（1件）、山口県文書館徳山毛利家文庫（2件）、早稲田大学中央図書館服部文庫（1件）。

②2011（平成 23）年度小計 41 件。  
茨城大学附属図書館（2件）、大阪市立中央図書館（3件）、大阪天満宮御文庫（2件）、国立公文書館内閣文庫（20件）、国立国会図書館（2件）、東京大学史料編纂所（8件）、山口県文書館明治期政府布達類（1件）、横浜市立中央図書館（2件）、奈倉哲三私蔵本（1件）。

③2012（平成 24）年度小計 10 件。  
白杵市教育委員会稲葉家文庫（1件）、白杵市教育委員会稲葉家文庫家老後藤家旧蔵（1件）、国立公文書館内閣文庫（再調査・1件）、国立国会図書館議会官庁資料室（5件）、国立国会図書館憲政資料室三島通庸関係文書（1件）、東京都公文書館（1件）。

④現地調査の実施地域は WEB 報告書の『『太政官日誌』』の同版・異版・異本調査マップ』に示される。

(4) 調査カード情報のデータ化・共有化にあたり、元になった『太政官日誌』調査カードの作成枚数は 2,092 枚である。調査結果はデータ化して、その結果をクラウドサービスの Google ドキュメントまたはドライブの Spreadsheet で共有化した。データ件数は 106,692 件である。

(5) 現地再調査は 2011 年 6 月から 8 月にかけて実施した。再調査した機関は、岡山大学附属図書館、中央大学図書館、東京大学経済学部資料室、東京大学史料編纂所、東京大学総合図書館、名古屋市立舞鶴中央図書館、早稲田大学中央図書館である。2011 年 9 月以降の調査では、同版・同版（修あり）・異版データ等が蓄積されてきたため、初回の現地調査時に合わせて内容を確認した。

(6) 同版・同版（修）・異版の調査結果と研究成果は、WEB 報告書の第 1 部「史料学的考察」の石田七奈子「摺り消し・訂正記事から見る『太政官日誌』の異版調査」、同「摺り消し・校正記事等によるチェックリスト表」、山口順子「『太政官日誌』諸本比較表による異版の抽出と解析」、同「諸本比較表・京都版」、同「諸本比較表・江戸・東京版」に示される。

(7) データ集計の設計は第 1 次から第 3 次に至った。その経過と概要は WEB 報告書の第 1 部「史料学的考察」の山口順子「『太政官日誌』書誌データのデジタル化ーWEB 上

での入力・集計・グラフ集成一」に示され、集計結果は WEB 報告書の第 1 部「史料学的考察」の山口順子「『太政官日誌』調査カード・デジタル集成一」によって共有化されている。

(8) 公開研究会を 2012 年 12 月 9 日（日）13:30ー17:30。東京大学史料編纂所大会議室（福武ホール）において開催した。報告者とタイトルと報告の順番は、以下の通りである。

①藤實久美子「『太政官日誌』の共同調査についてー方法論の模索ー」

②石田七奈子「摺り消し・校正に見る『太政官日誌』同版（修）本の紹介について」

③山口順子「『太政官日誌』諸本比較について」

また会場の一部で、展覧会を開催し、原史料・写真複製により同版（修あり）・異版の実際を実見してもらい、議論した。公開研究会の様子は、WEB 報告書の「平成 24 年度公開研究会の記録」に示される。

(9) WEB 報告書の第 2 部「戊辰戦争期の社会文化論」には 7 本の論考をおさめた。各論考の著者・タイトル・概要は、以下の通りである。

①箱石 大「修正された『太政官日誌』掲載の戊辰戦争届書」は、『太政官日誌』慶応 4 年第 13 号に掲載された安塚の戦いに関する鳥取藩と土佐藩の戦争届書が、その後刊行された同版（修）本で修正されている事例を検討し、両藩間には安塚の戦いの最中から不和が生じ、戦況認識にも齟齬があったため、戊辰戦争終結後、土佐藩からの訴えにより両藩は同戦役の届書を再提出することになったという事実が、『太政官日誌』に掲載された届書を修正する理由となった可能性があることを指摘した。つまり、官版日誌に掲載された戦争届書には摺り消し・差し替えといった修正が加えられたものが存在する。その中には、単なる誤字・脱字の訂正ではない、何らかの政治的意図が感じられる修正もあったことを示した。

②奈倉哲三「江戸版『太政官日誌』の刊行開始期と「五榜の揭示」第三札の修正」は、『太政官日誌』の現地調査を踏まえて、江戸版『太政官日誌』の刊行時期を絞込み、慶応 4 年（1868）5 月 1 日に近い日から数日までの間と限定した。また「五榜の揭示」第 3 札の修正問題については、「諸外国から強い抗議を受けたため」との通説的見解を斥け、制定直後から新政府外国局関係者であった、欧米諸国の感情を刺激するのではないか、との懸念から始まったものであることを、その具体的経過とともに解明した。

③清水詩織「尼崎藩公議人服部清三郎と『太政官日誌』」では、早稲田大学中央図書館に

架蔵されている服部文庫にある『太政官日誌』の旧蔵者・服部清三郎（諱を元彰、南梁と号す）の経歴を明らかにし、幕末期の尾崎藩在府儒者として、また明治新政府の元で公議人・大参事として活動をした清三郎にとって、『太政官日誌』が必要不可欠なものであったことを示した。

④山口順子「尾張藩における『太政官日誌』の受領 - 藩庁と藩士の諸相 -」は、徳川林政史研究所所蔵の「太政官代御事書」等の示す受領状況と名古屋市蓬左文庫所蔵の異本『太政官日誌』から藩庁内の情報伝達過程を考察するとともに、伊藤圭介や尾崎忠征の日記にみる購入行動を通じて『太政官日誌』をめぐる情報接受の組織と個人、個人間の差異を示した。

⑤寺島宏貴「『太政官日誌』利用の一端—中央大学図書館所蔵本から—」では、蔵書印から二つの系統（後者は一部元年分を含む）が見出された。前者には各藩の戦争届書を中心に付箋が貼り付けてある一方、後者については、蔵書印に印刻された地域の講で、『太政官日誌』を用いたことがわかった。

⑥山田英明「旧会津藩支配地における『太政官日誌』に関する一考察—東京大学経済学部資料室所蔵本を手がかりとして—」では、戊辰戦争において新政府と対立した会津藩の支配地における『太政官日誌』に着目し、東京大学経済学部資料室所蔵の『太政官日誌』を取り上げ、その出所（会津藩領大安寺村坂口家）と概要を整理した。

⑦松沢裕作「官庁文書のなかの『太政官日誌』」では、太政官旧蔵の『太政官日誌』、愛知県庁旧蔵および埼玉県庁所蔵の『太政官日誌』の伝来過程を検討し、明治期の官庁における『太政官日誌』の保管と利用について考察した。いずれの事例においても、現存の『太政官日誌』は発行時に当該官庁に交付されたものではなく、その後の実務需要に応じて入手されたものであり、また明治中期以降、「記録」と「図書」が分離される過程で、太政官においては「図書」に、愛知県・埼玉県においてはそれぞれ「記録」に分類されて今日に伝わったことを示した。

#### (10) WEB 報告書以外の学術的な成果

本研究の成果の一部は、以下の図書・雑誌論文によっても公表されている。

①箱石 大編『戊辰戦争の史料学』（勉誠出版、2013）は、戊辰戦争における歴史的諸事象を解明するための史料学（文字史料・画像史料）を開拓する新動向と課題と展望を示した。

②山口順子『民間木版新聞群』とその情報環境（箱石 大編『戊辰戦争の史料学』）は、京都版『太政官日誌』およびその再・改版である江戸版『太政官日誌』や『江城日誌』へ

の、江戸発行新聞の影響および官許なき刊行物の発禁との関係を論じた。

③山口順子「『太政官日誌』の発刊—史料による実態の考察—」（『出版研究』42号、2011）は、尾張藩の京都役所の史料から、『太政官日誌』慶応4年第1号は慶応4年2月26日に太政官から配布されたことが示され、第2号以降の配布状況について日付を抽出している。

④石田七奈子「東京大学史料編纂所所蔵『太政官日誌』の特徴」（『画像史料解析センター通信』57号、2012）は、東京大学史料編纂所所蔵の『太政官日誌』諸本の書誌情報と伝来と構成を詳細に分析し、同版・同版（修あり）・異版・異本の混入状況を明らかにするとともに、東京大学史料編纂所本は8種あり、太政官・内閣における修史編纂事業の過程で収蔵された系統、明治44年に文部省設置の維新史料編纂会による明治維新史料編纂事業の過程で収蔵された系統に大きく分かれることを示した。前者には欠号・欠本が多く、消耗品的に使用された形跡もある。後者には購入・寄贈などの管理情報が見られるが、やはり書き込みなど修史編纂での利用の痕跡が残されている。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計7件）

①箱石 大、京都大学附属図書館所蔵トコトンヤレ節版木調査報告、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信、査読無、58号、2012、25-28

②箱石 大、戊辰戦争と佐倉藩—維新期における譜代藩の動向—、佐倉市史研究、査読無、25号、2012、5-20

③箱石大、Max von Brandt und die preußische Diplomatie in den letzten Tagen der Tokugawa-Zeit（原題：戊辰戦争とマックス・フォン・ブランド）、Ferne Gefährten: 150 Jahre deutsch-japanische Beziehungen（遠来の友：日独修好150周年記念論文集）、査読無、2011、61-67

④箱石 大、幕末維新史と戊辰戦争、歴史評論、査読無、735号、2011、29-38

⑤松沢裕作、明治太政官における歴史記述の模索—修史館編「征西始末」をめぐって—、東京大学史料編纂所研究紀要、査読無、21号、2011、58-75

⑥藤實久美子、江戸書物問屋仲間の構造と板権の実効性 - 武鑑株を事例に -、江戸文学、査読無、42号、2010、90-97

⑦箱石 大、戊辰戦争下における通信・交通路の治安状況 - 奥州道中杉戸宿で起きた羽黒藩士殺害事件 -、古文書が語る地方史、査読無、2010、182-192

〔学会発表〕（計2件）

- ①藤實久美子、『太政官日誌』の共同調査について—方法論の模索—、戊辰戦争期木版刊行物研究会、2012年12月9日、東京大学史料編纂所
- ②箱石 大、戊辰戦争と佐倉藩—維新期における譜代藩の動向—、佐倉の歴史講演会、2011年10月22日、佐倉市立美術館

〔図書〕(計5件)

- ①箱石 大編、勉誠出版、戊辰戦争の史料学、2013、441
- ②藤實久美子、政府系本屋の維新史、箱石大編、勉誠出版、戊辰戦争の史料学、2013、295-341
- ③松沢裕作、明治政府の同時代史編纂—「復古記」とその周辺—、箱石 大編、勉誠出版、戊辰戦争の史料学、2013、169-189
- ④松沢裕作、重野安繹と久米邦武、山川出版社、2012、85
- ⑤藤實久美子、江戸書物問屋の仲間株について—出版界の秩序化—、笠谷和比古編、思文閣出版、一八世紀日本の文化環境と国際環境、査読有、2011、233-251

〔その他〕

ホームページ等

- ①本研究のWEB 報告書  
<https://sites.google.com/site/dajokannishi/>
- ②戊辰戦争期木版刊行物研究会 HP  
<https://sites.google.com/site/boshinjls/>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

藤實 久美子 (FUJIZANE KUMIKO)  
ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：90337907

### (2)研究分担者

箱石 大 (HAKOISHI HIROSHI)  
東京大学・史料編さん所・准教授  
研究者番号：60251477

### (3)連携研究者

松沢 裕作 (MATSUZAWA YUSAKU)  
専修大学・経済学部・准教授  
研究者番号：20361652